＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

トイレマークからみた

国際化・性の受容に関する研究

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第１章　プロジェクトの概要

１．プロジェクト名

トイレマークからみた国際化・性の受容に関する研究

２．代表者及び構成員

・代表者

飛田　舞　　家庭領域専攻　４回生

・構成員

石田理紗子　家庭領域専攻　４回生

小橋　奈央　家庭領域専攻　４回生

３．助言教員

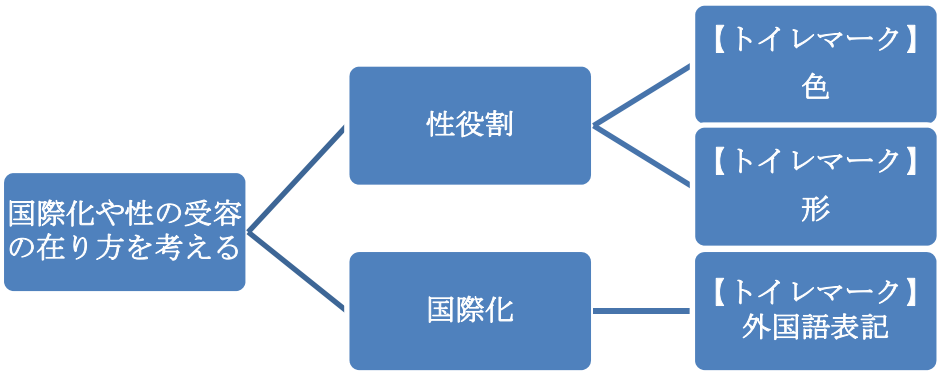
杉井　潤子先生（家政科）

４．プロジェクトの目的

本研究は、人間の基本的な生理的欲求の一つとして欠かせず、家庭内のほか、学校や職場、地域においても、必ず一日に４、５回は通い、使用する「トイレ」に着目をした。その意図は、「トイレ」とは単なる排せつの場という以上に、社会的にも文化的にも性を区別し、その社会の成熟度を示す身近な存在であるからである。とくに、私たちは、トイレの入り口は無意識の性差を象徴し、その掲示は社会的含意を表すという点から身近な生活施設としてトイレマークから生活意識を探れるのではないかと考えた。

そもそも、性差と性別役割分業は違うという事を船橋恵子・堤マサエ(1992)は述べている。性差があるという事は男らしくない、女らしくないとみなされ、性別役割分業を果たしてないとされる事であり、この事は不平等な扱いを受ける事とつながる。この問題は「男らしい・女らしい」という性に求められる役割への期待から生じる。トイレマークでも、青は男・赤は女、ズボンは男・スカートは女という色や形で性別に求められるものの、固定が図られているのではないか、という疑問を抱いた。また、トイレに入るときに、何を見て、自分の性別に合うほうを選んでいるのかということにも疑問を抱いた。

以上から、具体的には、実際にトイレマークはどのように分類されており、如何なる特徴を有しているかを調査し、トイレマークから読み取れるその社会の成熟度の指標である国際化や性の受容のあり方を明らかにしたい。



第２章　内容や実施経過、得られた成果

【調査１】

先進的取り組みをされている愛知県大府市市役所および男女共同参画センターへの聞き取り調査

愛知県大府市は平成 12 年 9 月から平成 20 年 3 月まで、男女で全く同様のトイレマークを採用していたことで当時メディアでも頻繁にとりあげられていた。また、大府市は男女共同参画に積極的に取り組んでいる地域であり、その観点からこの男女共通のトイレマークを使用していた。そこで私たちは、大府市視察を行いトイレマークでの男女の区別を取り除いた取り組みについて大府市役所の方にお話を伺った。

１．方法

日時：平成 23 年 12 月 21 日（水）
　　13:30～14:30

場所：石ヶ瀬会館

今回は愛知県大府市役所市民協働部協働促進課の阿知波修さんと男女共同参画を目指す交流の場である石ヶ瀬会館館長の田端美知子さんに、学生 3 名でのインタビュー形式で行った。

２．インタビュー内容

「なぜトイレマークを男女統一しようとしたのか」

―男女参画の視点が最も大きい。色や形で男女の固定概念をつくり上げているのではないかということでトイレマークの男女統一が採用された。

「トイレマークを男女統一したことに対する市民の反応」

―賛否両論。今までの色や形で判断する習慣によって間違えてしまう人も多かった。特に子どもとお年寄りにその例が多い。区別と差別は違うのではないかという意見もあった。

「トイレマークを男女統一にして良かったこと」

―大府市独自のマークであり、特徴になった。批判的な意見もあり、結果的に一般的なトイレマークに戻すことになったが、男女参画につながる議論が活発に行えたことが良かった。

「一般的なトイレマークに戻した時の反応」

―研究者たちが、男女共同のトイレマークの浸透を期待していたので残念に思っていた。

「改善点であったところは」

―色だけを変えてしまったことが、間違えてしまう人を増やしてしまった一番の要因だったのではないか。

「今後また、男女統一のトイレマークが採用されることはあるのか」

―一切ない。区別と差別は違うという意見が強く、反対意見を覆すだけの意見がないと難しい。

３．インタビューを終えて

トイレマークは確かに、男女それぞれの固定概念に沿って作られている。そのことに対して、男女共同参画の視点から男女統一のトイレマークを採用した大府市の取り組みは先進的であった。

しかし、インタビューの中でもあったように、間違えてトイレに入ってしまう人が多いことは問題であり、区別と差別は違うのではないかという意見は非常に考えさせられる。

一方で自らの性に違和感を持っている人の立場になると、トイレマークを固定概念で固められていることは見逃すわけにはいかない。男女の区別をなくすことだけに力を入れるのではなく、多目的用（誰でも利用できる）トイレの充実を図ることが問題解決に繋がるのではないだろうか。

【調査２】

トイレマークの調査

１．方法

調査期間：平成 23 年 6 月 20 日
～平成 24 年 1 月 13 日

調査地域：主に京都周辺

記録方法：写真撮影

記録対象：トイレマーク

トイレマーク撮影済みか所

(2012/1/13 現在　撮影箇所:計 73 か所/撮影枚数計 215 枚)

ショッピングモール：計 15 か所
ホテル：計 5 か所
映画館：計 1 か所
交通機関：計 19 か所
公園：計 2 か所
公共施設：計 3 か所
公衆トイレ：計 6 か所
寺社仏閣：計 6 か所
博物館・美術館：計 2 か所
病院：計 1 か所
役所：計 4 か所
その他：計 2 か所
海外:2 カ国（大韓民国、フィンランド）

２．結果及び考察

（１）トイレマークの分類(色)

愛知県大府市では、2000 年から 2008 年まで男女共同参画社会実現に向けて、トイレマークの色と形を緑に統一するという政策が試みられた。結果として批判も多く、現在は修正されてはいるが、この政策で色と形を統一した理由として、「男は青(黒)、女は赤という色や形のイメージから性別が固定化されてしまう事を避けるため」という意図があげられていた。

自身が小学校の時、男の子は黒のランドセル、女の子は赤のランドセルとランドセルの色が決まっていた。この事も性別と色が固定化されていた事を示す。本研究を通し撮影したトイレマークの写真から、色により性別の固定化が図られているのかを明らかにする。

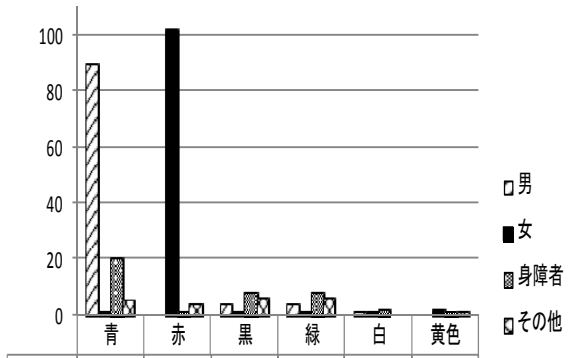
今回撮影したトイレマークの写真から、トイレマークはどのような色で表示されており、性別はどのように分類されていたかを図１に示す。

今回調査で回収したトイレマークの色は青、赤、黒、緑、白、黄色が存在したが、一番多いのは青であり､続いて赤であった。

図１より、青は男・赤は女という分類が固定化していることが分かる。青は女性トイレで一つだけ見受けられるものの、男性トイレで赤のトイレマークは存在しないことが分かる。また、黄色のような暖色も男性トイレには使用されていない。

青と赤以外の黒と緑は男女の区別ではなく身障者や乳幼児用設備が備え付けられている事を示すマークの色として多用されている事が認められる。この調査結果より女性と身障者のトイレマークは全ての色が用いられていたのに対し､男性は青､黒､緑､白のみでしか用いられていなかった。女性は色の多様性が認識できるが男性の色は比

較的固定的で、この事は現代社会において女性は仕事を行いながら家事を行うなどの多様な生き方を求められるが、男性は家庭を支える為に働くという選択肢が固定的という男女の生き方を表しているようにも見える。



	青	赤	黒	緑	白	黄色
男	90	0	4	4	1	0
女	1	102	1	1	1	2
身障者	20	1	8	8	2	1
その他	5	4	6	6	0	1

（図１）トイレマークの色の分類結果

（２）トイレマークの分類（形）

男女の表示について、ズボンをはいている人型を「ズボン」、スカートをはいている人型を「スカート」、線や細いシルエットで表された人型を「棒人間」、キャラクターなどで表されたものを「キャラクター」、帽子やリボンなど装飾品で表されたものを「装飾」、上記以外を「その他」として分類した。

分類結果（表１）をもとに考察すると、ズボンでは男性を表すものしかなく、スカートでは女性を表すものしかなかった。そのことから、男性はズボン、女性はスカートという意識があることが分かる。女性でもズボンを穿くが、男性がスカートを穿くことはほとんどない。そのため、スカートは女性のもの、というイメージのもとにこのマークは使用されていると考える。「棒人間」においても男性の形しかなく、棒人間の形を採用しているトイレの女性用マークは細いシルエットながらもスカートをはいているものである。今回撮影した女性用トイレマークのうち９割以上がスカートをはいているものであり、スカートは女性のもの、という意識が万人に通用するものであることが分かる。このことから、トイレマークは、女性の特徴や女性にしかないものを取り入れることによって、男女の違いを表していると考える。

現代の社会において、女性が男性のようにふるまったり、男性のような服装をしていてもほぼ違和感なく過ごすことができるが、男性が女性のようにふるまい、女性の物とされるスカートやリボンをつけると、違和感を持たせる。女性が男性らしくなることは許されても、男性が女性らしくなることは許されにくい、というのが現代の世の中であると考える。

すなわち、トイレマークにおいても、男性が女性のようにすることはあり得ないと考えて、マークに女性のものとして認識されているものを取り入れることで、男女の区別ができると考える。したがって、男性もスカートをはくことが普通となった時には、トイレマークもまた変化せざるを得ないのではないかと考える。

キャラクターや装飾においては、それぞれの男女の特徴を活かした形で表されており、女性はまつ毛やリボン、男性はネクタイやスーツで表されている。また、帽子をかぶった人（図２、３）で男女を区別してあるトイレでは、男性は角ばった帽子をかぶっており、女性は丸身をおびた帽子をか

ぶっている。これは、男性と女性の体つきと一致しており、男性のがっちりとした体格と女性の丸身をおびた体のつくりを感じさせる。男性と女性の変えられない身体の特徴をマークに表すことで男女の区別をすることができる。今後、服装や装飾品が男女の区別なく使用されるようになった場合、トイレマークは変わることのない男女の体の特徴で表すことが有効であると考える。

（表１）トイレマークの形の分類結果

	男	女
ズボン	87 枚	0 枚
スカート	0 枚	102 枚
棒人間	8 枚	0 枚
キャラクター	2 枚	4 枚
装飾	11 枚	4 枚
その他	3 枚	2 枚

（図２）女性ぼうし

（図３）男性ぼうし

（３）トイレマークの分類（外国語表記）

近年の国際化の進みはトイレのマークにも影響を与えているのだろうか。そこで、トイレマークの文字表記に注目し、どのような文字表記がなされているか分類し、施設ごとの文字表記の傾向や特徴について考察した。

文字表記で分類したところ、英語表記のものが最も多かった。次いで日本語、中国語、韓国語という順番で多かった。（表２）

次に、日本語のみで表記されているもの、英語のみで表記されているもの、2 ヶ国語以上で表記されているものに分類すると、2 カ国以上表記されている所が最も多い結果となった。（表３）このことからも、国際化の影響が見られる。

さらに、この 3 つの分類の中でそれぞれ施設によって特徴があるのかを検証した。以下にそれぞれの分類結果をまとめた。

【英語のみで表記】

レジャー施設 4 カ所、ショッピングモール 3 カ所、ホテル 3 カ所、寺社仏閣 2 カ所、病院 1 カ所、交通機関 2 カ所、公園 2 カ所、その他（大学コンソーシアム京都、東京六本木泉ガーデンヒルズ）2 カ所

【日本語のみで表記】

ショッピングモール 3 カ所、ホテル 1 カ所、寺社仏閣 2 カ所、病院 1 カ所、交通機関 6 カ所、公園 1 カ所、公衆トイレ 1 カ所、役所 1 カ所、博物館（京都アスニー）1 カ所、学校 1 カ所

【2 カ国以上で表記】

レジャー施設 1 カ所、ショッピングモール 4 カ所、交通機関 13 カ所、公園 5 カ所、博物館 2 カ所、役所 2 カ所

施設ごとに分類した結果、英語のみの表記はレジャー施設、日本語のみの表記は交通機関、2 カ国以上の表記も同様に交通機関が最も多いということが分かった。

英語のみで表記されている場所は、レジャー施設やショッピングモール、ホテルなど、場の雰囲気を重視（概観を重視）しているような施設が多い傾向にあるといえるのではないだろうか。2 ヶ国語以上表記されている場所は交通機関が最も多いことからもわかるように、多国籍の人が利用され

ると予想される施設が多い。外国人の利用する場所で考えると寺社仏閣も２ヶ国語以上の表記が多いことが予想されたが１カ所も該当しなかった。また、テレビ塔（公園）の、男性用トイレは英語と日本語で表記されているが多目的用トイレ（身体障害者用トイレ）は日本語のみで表記されているという例もあった。多目的用は車いすの絵と「どなたでもご使用できます」という日本語表記がされているが、日本語のみの表記では身体障害者のみが使用できるトイレであると考える外国人も多いのではないだろうか。

以上より、施設による文字表記の傾向や国際化の影響についてまとめると、やはり現在のトイレマークは２ヶ国語以上で表記されているカ所が多く、また交通機関でそのようなトイレマークが多く見られることから日本の国際化が覗えた。

しかし、ショッピングモールなど、国際化に適応するためではなく外観のために外国語を使用しているだろうと思われるものもあった。

（表２）文字表記の分類

日本語	71 カ所
英語	83 カ所
中国語	24 カ所
韓国語	16 カ所
その他	2 カ所

（表３）表記数の分類

英語のみで表記	18 カ所
日本語のみで表記	18 カ所
２ヵ国語以上で表記	27 カ所

第３章　結論

自身の性別に違和感を感じる人にとっては男女どちらのトイレにも入りにくいという問題が生じる。実際、本研究の構成員である小橋が卒業研究で行ったアンケートで、ある女性教員から「どうしても女物を身につけられない生徒がいる。現在制服は選択できるが、トイレの選択は出来ないのでトイレも選択させてあげたい。」との意見を頂いた。この意見から、トイレに入る際に自身の性を生物学的な性により分けられてしまう事に苦痛を感じているという子どもがいるという問題が存在していることが分かる。この問題は性別の固定化ということのみだけでなく、トイレの区別を男と女しか分けない事にあると考える。

性別は生物学的にも社会的・文化的にも男と女しか存在していない。しかし現在、男でも女でもないセクシュアル・マイノリティの人々がいることも考えなくてはならない問題である。男だから、女だからという性別としての役割ではなく、その前提にある一人の人間という事を念頭に置き、全ての性を個性として受け止める事が肝要である。

性別は文字の通り「性を分ける」という意味を持つ。しかし、性は２つに分けると完全に決められた訳ではない。男でも女でもないという概念が人々に根付き、男と女という２つの性による分別のみでなく、それ以外の性が認識され、全ての人々、一人ひとりの人間の性の個性が尊重される社会が訪れる事を願う。